

●「くまもとアートポリス」にまつわるエピソード、計画地周辺の話題などを、本誌上で取り上げていきます。ご意見、ご感想をお寄せください。

くまもとアートポリス'92に向けて
世界の建築博、都市博めぐり-----4

フランクフルト博物館通り ドイツ



市役所前広場。戦後完璧に修復され、中世の面影を今に伝えている

まちづくりを通じた国際交流は今、ますます盛んになってきています。このページでは、世界中の都市で開催される「まちづくり」のための展覧会や博覧会などをレポートします。



ドイツ建築博物館・映画博物館



散歩がてらに博物館巡りができるような街づくりがされている地域だ。

フランクフルト博物館ツアーはざっとこんな具合に繰り広げられる。

ヨゼフ・ボイスの作品をコレクションする近代美術館（ハンス・ホライン設計）、美術工芸博物館（リチャード・マイヤー設計）、宗教画や聖遺物を収めた考古博物館（ヨゼフ・パウルクライフス設計）、世界の建築家は必ず巡礼するドイツ建築博物館（オスヴァルト・マチアス・ウンガース設計）、それにヴァケーションの季節には若者たちで賑わう映画博物館。

20余りもある博物館はすべて歩いて10分程度の場所にあるから、散歩がてらにどうぞというわけだ。

フランクフルト市では、この他世界の建築家を招待して、市内の幼稚園（ピーター・ウィルソン設計）やオペラハウスの改修（伊東豊雄設計）の設計などを起用、話題づくりを演出している。

このような計画は、街の中心部にある計画局のロビーに置かれた街の全体模型に示され市民に広く公開されている。

12 世界中の金融機関が集まり、日本人ビジネス人も町を闊歩するドイツ最大の国際都市、フランクフルト。街は中世の街の雰囲気を現在に伝えるメイン川沿いの地区と超高層ビル群が建ち並ぶ中心部、そして国際ブックフェアが開催さ

れるメッセ会場と新旧織り混ぜた様々な表情を見せている。今回、ご紹介するのはメイン川沿いに広がる「博物館の河岸」と呼ばれる地域。過去の遺産である中小の邸館を、世界の建築家と共に特徴ある美術館や博物館に転用し、

速報 伊東豊雄氏、八代市立博物館、未来の森ミュージアムで1991年度毎日芸術賞を受賞！

伊東豊雄氏は八代市立博物館、未来の森ミュージアムの設計に対し、1991年度毎日芸術賞を受賞した。

この賞は毎日新聞社が1957年度から毎年、文学、美術、演劇、音楽、そして建築など日本の文化を創造する各領域でもっとも重要な、意義ある功績を成し遂げた人に授与しているものである。

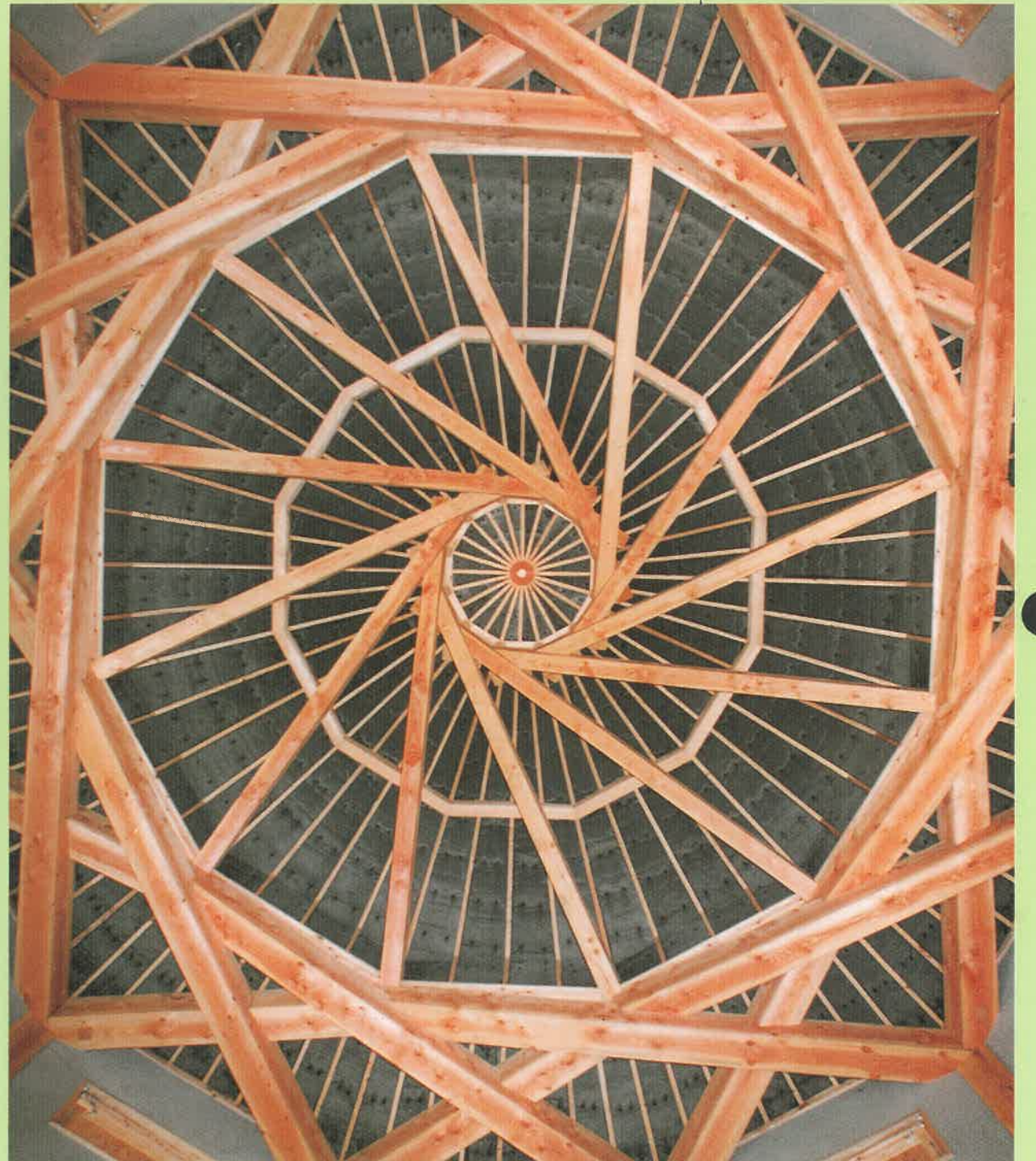
今回受賞したのは伊東氏のほか、大平山涛（書道）、工藤甲人（絵画）、高井有一（文学）、日本現代音楽協会（特別賞／音楽）の各氏。

挨拶に立った伊東氏は「建築は建ち上がる



と子供のように育ち、やがて（設計した）自分を見返してくる。この子供は多くの八代の人たちに育てていただいたような気がする」と述べた。

- くまもとアートポリス参加建築家に聞く 清和文楽館／石井和紘氏
- くまもとアートポリス'92実行委員会設立
- 伊東豊雄氏、八代市立博物館未来の森ミュージアムで毎日芸術賞受賞
- 世界の建築博、都市博めぐり---フランクフルト



清和文楽館 設計 石井和紘

●発行-くまもとアートポリス事務局
熊本県土木部建築課内 熊本市水前寺6-18-1
tel. 096-383-1111 (内線6220/6221)
fax. 096-384-9820
●編集-くまもとアートポリスコミッショナー事務局
東京都渋谷区渋谷2-5-7 本間ビル
建築・都市ワークショップ内
tel. 03-3407-4753 fax. 03-3407-8753

K·A·P

9202

清和文楽館 設計者 石井和紘氏



2

3

写真提供 石井和紘建築設計室

建設の進む清和文楽館



○石井和紘プロフィール
 1944年東京に生まれる／1967年東京大学建築学科卒業／1969年同大学院修士課程修了／1975年イェール大学建築学修士号および東京大学博士課程修了／同年石井和紘建築設計室開設／日本の伝統的な建築に対する著作も数多い

●3,000人の小さな村に文楽が伝わっている。
 これは素晴らしいことですね。

文楽と石井さんのつながりから伺いたいと思います。まず文楽館の設計を依頼されたときの印象からお聞かせ下さい。

私は以前から数寄屋建築を設計していました。また、歴史的な町並みのなかに新しい建築を作るという経験もありましたので、コミッショナーである磯崎新さんが、このプロジェクトに適当だとお考えくださって指名されたんだと思っています。

それから、私は以前から長唄を練習しています。そんなこともあるいは文楽劇場の設計というチャンスに結び付けられたのかも知れません。

私は直島（香川県）という所にいくつかの建物を設計しておりますが、たまたまここには女文楽という、日本では非常に珍しい伝統が残っているんです。全国的に見ても女文楽はふたつしか残っていないと聞いていますから、これは大変貴重なものです。

私が設計した一連の町の施設の中で町民体育館がありますが、武道館がくっついている。実はこれが文楽保存のための集会施設として使われているんです。

それから、これは現代建築にかかわる建築家としての印象ですが、ずいぶん試練を与えられたな、という風を感じましたね。すでにアートポリスでは篠原（一男）さんや、山本（理頭）さん、伊東（豊雄）さんという建築家が活躍をされた後ですからね。街中ではないし、予算もけっして大きいわけではない。でも、それが逆にファイトを起こさせていったんです。

その後、清和村を訪れて、村の方々と建物の構想を練っていったわけですね。

敷地を訪れてみた時は、正直言いまして「えーっ、こんなところに何をやるの？」っていうような印象でした。いろんな意味でふだん私達が暮らしている都会からの大きなギャップがある。でも、その後、村の人々とお会いして話をしているうちに、なんとなくイメージが湧いてきた。彼らのものをつくらうという頑張りやうというのには素晴らしいものでしたね。とにかく精一杯やらせてもらおうと思いました。

このようなところに、そこに住む人々と何か新しい物をつくるということは、まさしく「鄙」の論理や精神というような物を感じましたね。だんだんアートポリスの意図を感じていきました。実際に江戸時代の文楽が、大都市ではなくこのような山村に伝承され、完璧な形で保存されているということからしても、その精神の強さを証明している。東京に先端文化があって、それが熊本の村々に伝播していくというのではなくて、こんなパワーが逆に押し返していくんだとわかった。

そういえば、こんなことがありましたね。上棟式の時に村長さんが口上を申し上げられた。集まった村の人たちに申し上げられるのかと思ったら、阿蘇の山に向かってなんです。その時私は「これだな」と気がついた。なんでこの建物の建設に村の人たちが大きな情熱を持って頑張ることができたかと言うと、この阿蘇の山の何かとてつもなく大きい、神のようなものに対して、力を合わせていたんだと。中心人物は阿蘇の山の神々だった。

●清和文楽館の特徴ある小屋組



劇場小屋組



劇場舞台上部小屋組



展示室小屋組

4

建築名 清和文楽館
所在地 熊本県上益城郡清和村大字大平原口152番地
主要用途 文楽劇場・展示館
事業主体 清和村
設計者 石井和敏建築研究所
構造設計 浜宇津構造設計室
設備設計 郷設計研究所
施工 建築/日勤工務店
敷地面積 10,200.07m²
建築面積 856.56m²
延床面積 781.95m²
構造 木造
規模 地上2階
設計期間 1990年7月～1990年10月
工事期間 1990年12月～1992年3月

いずれにしても阿蘇の山の神々に畏敬の念を抱き続けている人々は平和で、そして何か大きなものを持っている。このような中で文楽が伝えられてきたんですね。

さて、石井さんが設計を始められて、最初にスケッチを村に持っていった時の清和村の皆さんの反応はいかがでしたか？

「すごいものが建つことになるな、えらいことになった」と感じられていたとは、思いますが、不可能だとは思われてなかったようですね。

なにしろ、わずかに人口三千人の村で高さ13メートルの木造建築ができてしまったんですからね。日本には秋田、長野、愛知、そして熊本という有数の林産県がありますけれども、県単位でもこんな小さな村にかなわないんじゃないか、これは胸を張っていいんじゃないかな。

この文楽劇場の建物の特徴についてお伺いしたいのですが。

実はこの敷地の近くにある神社の境内に小さな小屋がありましてね。以前はこの小屋が舞台になっていて、その前に観客はゴザを敷いて公演を見ていたんです。これは小さな小屋ですが、スピリットが一本通っている。だからこれは負けれないと思った。在来の日本の大型木造建築の工法を踏襲することに決めました。ところが、意外なことですが、日本の建築基準法の中では在来の木造による大型建築が予想されていない。在来工法でこんな大きな建築が作られると予測していなかったからそんな記載がなかったんですね。その後、熊本県の建築課の方々の理解もあって、ほとんど例のないこんな木造大型建築の工法が成立したわけです。

構造の特徴をわかりやすくいえば、いわば奈良のお寺の建築構造に使われている「斗供」なんです。これは持ち送り、相じゃくりを使ってだんだん屋根を持ち出していくテクニックなんです。近代の構造は切った部材同士をつなぐことができるけれど、伝統的な木構造ではそれはタブーですから、このような方法が使われてきたんですね。

一つの部材に乗って、乗り合っていくわけです。舞台の部分も同じテクニックです。これは東大寺の南大門と同じテクニックですが、実は生活の中で割りばしを組んだり、バットを組んだりしているのとまったく同じ考えなんですよ。

この構造を採用するためには3分の1の模型を作って入念にチェックしました。相じゃくりにしても、正確さが要求されて大変な作業なのですが、皆さんによく作っていただいたおかげで、組み上がった後の変位もほとんどありませんね。

ご老人がいらっしやると、よくこの天井の構造を見て、「これは屋根から吊ってあるから、危ないだろう」といわれたりしますが、一般の人達にもそんな緊張感が伝わってくるんですね。

今回は奈良寺社建築の技法を僕なりに解釈して、現代の建築に活かしているんですけども、これはバブリックな建築なので、数寄屋とは違います。

文楽の芝居小屋というのは大変珍しいと伺っていますが。

日本は実は劇場国なんです。歌舞伎の芝居小屋だけで千軒もある。熊本にも山鹿の八千代座という小屋が現在に伝えられて、私もこの現場に来るついでに寄ったりしましたが、

一種独特のおどろおどろした魅力を感じますね。これは現代の劇場にはない感動を与えてくれます。ですが琴平、山鹿なんかが有名ですけども、そこにも文楽はない。瀬戸内地方では文楽を船の中でやります。そんなことで「船底舞台」なんて言われているんですね。ちょうど船の深さが人形を隠すようになる。テレビの普及からこのような舞台がいま一つ盛り上がり欠けていますけれども、やはり地方のコミュニティにとって、参加しながら文化を作っていくためには、このような伝統芸能を守っていくことがつくづく重要だなという気がします。

文楽、能舞台、お神楽といった舞台などいろいろありますが、文楽は前例がなかっただけに、清和村でできたものが今後の雛型、モデルになってもらえればと思いますね。もうすでに、岐阜の「まくわ文楽」に小屋があるように、いわゆる田舎文楽のなかでは、この熊本の清和村が飛び抜けて重要な位置を占めているのです。文楽というと一般では国がやってくれると思われがちですが、掘り起こしていくと日本全国にいくつもある。中部地方にはいくつもあるんです。文楽は全国的な組織を持っていなかったけれども、文楽サミットのようなものを組織して、全国的に俳優さんを巡回していただくことなんかが可能になるとすばらしいですね。

ここ清和村では、今まで農作業の傍らに演じていたものですから、人間国宝がここにやってくるとなったりすると、これはえらいことになりますね。でも、実はこの清和村に残っている文楽はかえって古式の文楽ですから、非常に価値がある。人形の歩き方一つ取ってみても、ここにしかないものです。

実際に清和村で文楽を演じてらっしゃるのは、どのような方なんですか？

それは、ふだんは農業を営んでいらっしやる村の方ですよ。いまでこそ高校にクラブができたりましたが、この15人の方はふだんの農作業生活の中でこの伝統を伝えてきたわけです。でも、このように注目を集めてくるようになると、農作業どころではなくなってしまうかもしれませんね。(笑)

落成式は4月25日です。たぶん、力の入った文楽の公演がいくつも行なわれると思います。

清和村の担当者、兼瀬さんは建設の間中、よく胃潰瘍にならなかったなあとと思うほど、いろいろと頑張っていたいたんですが、これから建ち上がる物産館とともにこの支配人として運営に携わっていただくことになっています。

鄙の論理と歴史に対する愛着、そして地理的な距離感や歴史的な距離感がここで一体化したと思っています。そんなパラドックスが実はこの清和村にある江戸期の文楽のなかにも隠されているような気がします。

東京風の建築をただ熊本に建てるという行為は、単にフローの文化が伝わっただけだと思う。ストックの文化というのは日本の建築は木造ですから、実体的な建築や集落やという形で残っているばかりではない。やはり時間と距離を持って現われてくるんでしょうね。日本におけるストックとしての文化を考えていかなくてはならないという気がしますね。(談)



劇場小屋組

5

08

くまもとアートポリス'92実行委員会発足する



設立総会

6

昨年12月、熊本市にある水前寺共済会館において、「くまもとアートポリス'92」を推進するための実行委員会設立総会が開催された。

これは福島譲二熊本県知事が発起人となり、熊本県内の有識者、財界、報道、建築関係諸団体に呼びかけられたもので、磯崎新くまもとアートポリス・コミッショナー、堀内清治くまもとアートポリス・アドバイザーといった、KAP関係者も列席し、行なわれたものである。

冒頭、福島知事は「KAP'92を機会に、KAP参加作品とともに、熊本に伝わる伝統的な建造物、そして街づくりを国の内外に紹介したい」と述べ、日本で初めての試みを立派な、そして波及効果あるものにしたと結んだ。

続いて磯崎氏は、いま世界中の話題を集めている街づくりを挙げるとすれば、ひとつはオリンピックを契機に盛り上がるバルセロナであり、もうひとつは熊本である、と

海外での評判を披露した。

また「日本の現代建築で海外においても話題を呼んでいるのはみなくまもとアートポリスのものだ」と海外でもKAPに対する関心の高さを披露した。

一方、堀内氏は地元の人々の街づくりへの参加を呼びかけ、KAP'92の開催をきっかけに、より大きな県ぐるみの運動としていきたいとその決意を述べた。

総会では、組織、アートポリス'92における事業計画などの審議、決議を行なった後、参加者によるディスカッションが行なわれた。その中で「熊本県らしい田園風景が残る街づくり」「より一層の市民、住民に対する建築プロジェクトの説明」といったものを求める意見が出され、これも一連のKAP'92事業のシンポジウム、展覧会、ツアーなどの事業のなかにテーマとして盛り込もうとの決意がなされた。

総会で決議されたKAP'92事業、実行委員会役員は右ページのとおりに。

くまもとアートポリス'92組織

くまもとアートポリス実行委員会

●顧問

熊本県議会議長
熊本県市長会会長
熊本県町村会会長
熊本県市議会議長会会長
熊本県町村議会議長会会長

●会長

熊本県知事

●副会長

くまもとアートポリスコミッショナー
くまもとアートポリスアドバイザー

●理事

熊本県議会建設委員会委員長
熊本市長
熊本県文化協会会長
(社)熊本県建築士会会長
(社)熊本県建設業協会会長
(社)熊本県建築士事務所協会会長
(社)新日本建築家協会九州支部熊本建築家の会代表
(社)日本建築学会九州支部熊本支所長
(社)土木学会西部支部「土木の日」熊本実行委員会委員長

熊本まちづくり協議会代表

(社)熊本県観光連盟専務理事

(社)日本青年会議所熊本ブロック協議会会長

熊本県地域婦人会連絡協議会代表

熊本日日新聞社代表取締役社長

NHK熊本放送局長

熊本放送代表取締役社長

テレビ熊本代表取締役社長

熊本県民テレビ代表取締役社長

熊本朝日放送代表取締役社長

エフエム中九州代表取締役社長

熊本県総務部長

熊本県土木部長

●監事

熊本県出納長

幹事会

●代表幹事

熊本県土木部次長(建築担当)

●幹事

熊本市/熊本県文化協会/(社)熊本県建築士会/(社)熊本県建設業協会/(社)熊本県建築士事務所協会/(社)新日本建築家協会九州支部熊本建築家の会/(社)日本建築学会九州支部熊本支所/(社)土木学会西部支部「土木の日」熊本実行委員会/熊本まちづくり協議会/(社)熊本県観光連盟/(社)日本青年会議所熊本ブロック協議会/熊本県地域婦人連絡協議会/熊本日日新聞社/NHK熊本放送局/熊本放送/テレビ熊本/熊本県民テレビ/熊本朝日放送/エフエム中九州/県総務部広報課/県土木部監理課/県土木部建築課

専門部会

見学会部会/シンポジウム部会/展示部会/まちなみ部会/関連事業部会/広報部会/交通宿泊部会/その他

平川和人
田尻靖幹
草西信義
嶋田幾雄
杉本三郎

福島譲二

磯崎新
堀内清治

山本靖

田尻靖幹

三浦洋一

右田健児

増永宏吉郎

佐藤可

伊藤琢二

三井宜之

中島重旗

山田穰

竹田勉

北時正彦

田中文子

永野光哉

片山健二

小堀富夫

河津龍介

竹下一記

林田正恒

長谷川孝道

青木豊

杉浦健次

木村剛勝

くまもとアートポリス'92 事業計画(案)

●開催期間

1992年11月(約1か月間)

●会場

県内一円

●主催

くまもとアートポリス'92実行委員会

●事業内容

1)アートポリス見学会

1992年までに建設されたアートポリス参加建造物と、本県を代表する既存建造物とを結ぶモデルコースを設定し、見学会を実施します。(県内一円)

2)アートポリス展(仮称)

アートポリス参加建造物、および既存建造物ならびに国の内外のまちづくり事例などを、模型、写真パネル、ビデオなどによって紹介します。(県立美術館分館ほか)

3)アートポリスシンポジウム(仮称)

国の内外のまちづくりに携わる建築家、都市計画家、および行政関係者等を集め、まちづくりに関するシンポジウムを開催します。(県立劇場、メルパルクホール、県内各地)

4)アートポリスマちなみ展(仮称)

県内の数か所において、すでに活動している地元まちづくりグループ等と共に、新しい街並の創造や、まちづくりに関するイベントを企画し、実施します。

5)市町村、関係団体、民間による事業

アートポリス参加建造物を活用したイベント(コンサート、文楽上演等)や、シンポジウム、各種コンペティション、コンクール等を実施します。

アートポリス展主会場に予定され、改修が急ピッチで進められている県立美術館分館(模型)



7

08

●アートポリス竣工プロジェクト

県立装飾古墳館

設計 安藤忠雄

所在地 鹿本郡鹿本町岩倉3,085
主要用途 資料館
事業主体 鹿本県
設計者 安藤忠雄
構造設計 アスコラル構造研究所
設備設計 設備技研
施工 建築/西松建設、本山建設、工事共同企業体
面積 敷地面積/6,338.00m² 建築面積/1,448.83m²
延床面積/2,098.98m²
構造規模 鉄骨鉄筋コンクリート 地下1階/地上1階

主な仕上げ コンクリート内放し
工事期間 1990年10月~1991年12月

※開館は4月15日、オープニング特別展は「装飾古墳展
~最近発見され話題となった装飾古墳」
入場料 400円(一般)
開館時間 9:30~17:00(入館は16:30まで)
休館日 月曜日、月曜が祝日の場合火曜日、
お問合せ先 県立装飾古墳館 電話(0968)36-2151
*以上は開館までの予定です。詳しくは館までお問合せください。



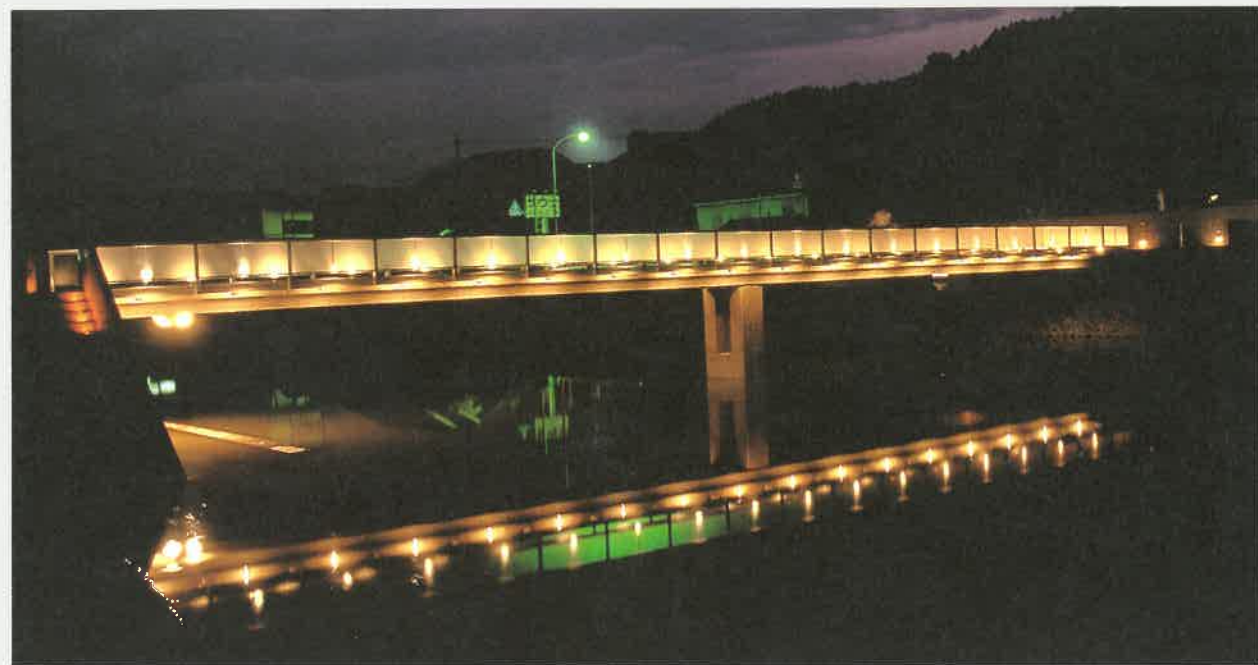
●アートポリス竣工プロジェクト

湯の香橋

設計 岸和郎

所在地 葦北郡芦北町湯浦
主要用途 遊歩橋
事業主体 芦北町
施工 建築/日本ビー・エス・コンクリート 電気/平田電気
構造規模 プレストレスト・コンクリート造 橋長/40.8m 幅員/3.34m
主な仕上げ 手摺り/鉄骨+ポリカーボネイト樹脂板
ロスト加工 床/RC洗出し、両サイドはグレーチング
工事期間 1990年12月~1991年5月

※昨年7月には湯の香まつり、手作りリカダレースが開催され、この橋がゴール、メイン・スタンドとして大活躍した。今年も数々のイベントが企画されている。
お問い合わせ先:
芦北町役場 建設課まで
電話(0966)82-2511



くまもとアートポリス講演会
安藤忠雄氏講演レポート

環境を刺激する建築

昨年、11月1日、八千代座に建築家が大集合した
県立装飾古墳館設計担当、安藤忠雄氏が
若い建築家に熱いメッセージを送ったのだった



安藤氏が大阪で世に出した処女作から、現在進行中のセビリア万国博日本パビリオンにいたるまで、23年間の作品をスライドで紹介し、独自の建築論を語った。

◎小さな住宅から始める

処女作は13坪の小さな住宅。「小さくてもひとつひとつ宝石のような建物を都市のなかに作っていく」と。駅前の超高層ビル群と小さなコンクリート造の処女作(その後自身の事務所として使われた)が写る印象的なスライドだった。

◎不便さの中に自然が見えてくる

安藤氏を建築界に印象づけたのはこの住宅から数年を経て作られた「住吉の長屋」である。近代建築のもつ合理性、機能的優先の風潮に対して、徹底的に逆らって計画してみようとした。コンクリート打ち放しで家の真ん中に中庭があり、玄関から居間に、居間から寝室に行こうとすると、必ず外部を通らなくてはならない。氏は外部の自然と接しながら生活することの重要性を訴える。

◎建築の公共性とは

「タイムズ」は京都市内高瀬川沿いに建てられた複合ビル。周囲の建築がみな川に背を向けて建てられていることに疑問を持ち、都市の建物の公共性を問うて見た。川と一体化して24時間開かれた広場のような空間を作ろうと、できるだけ河面に近いレベルまで下げられたテラス。川全体と建物が一体化した空間。実際には市役所と何度も議論を重ねて実現にこぎつけた。タイムズがきっかけとなって、隣のレストランも、そしてさらに隣も安藤氏に改築の設計が依頼されている。一連の計画が出来上がると、歩行者は川べりを散策できるようになる。かつて建物の裏壁で遮られていた高瀬川の流れが、いま回復されようとしている。

◎街づくりには時間をかけて

「六甲の住宅」は六甲の山並の急斜面に建設された集合住宅。誰もがここに建物をつくることは技術的に不可能だと考えていた。この悪条件に安藤氏は果敢

にチャレンジしたのである。いまではさらに隣の敷地に4倍の規模を持つ集合住宅を建設中であるという。手掛けてから次の物が完成する2001年まで23年の歳月がかかるという。新しい計画にはプールがつくられ、隣の集合住宅の住民や周囲の住民にも開放されるという。一建築家による、長期にわたるまちづくりである。

◎自然のやさしさに気づくチャペル

安藤氏が手掛けた3つの教会。神戸・六甲にある緑の中の教会、北海道・トマムの水の教会、大阪・茨木にある光のあるいは風の教会である。これも住宅と同じ考えに基づいている。いずれもコンクリートの壁と天井がむき出しで、質素だが力強い空間が、周囲の自然とコントラストを見せている。集う者に、日常生活の中では見えなかった自然のかすかな動きやあるいは大いなる感動に対峙させようというのだ。

◎大阪、中ノ島の挑戦

安藤氏が生まれ、現在も活動の中心としている大阪。この中心部「中ノ島」への提案、「地中30メートルの楽園」。かつて、中ノ島には美しい建築群があった。氏はこの慣れ親しんだ環境を復活させたいと願う。経済性のみを優先させ、近代的な街並みに移り変わってしまった現在の中ノ島の建築群に対する批判でもある。地上には美しい古くから受け継がれた建築だけを残してあとは公園に、一方、地下30メートルに文化施設を建設する大胆な提案だ。

また、大正に建設された中ノ島公会堂の改修保存案が紹介された。外観はそのままに保ち、内部に巨大な卵型のホールを挿入しようというもの。美しいコンピュータ・グラフィックスがスライドで写されると会場から驚きの声が上がった。刺激的なデザインやコンセプトを建築家側から積極的に提案して、大阪の街を変えていく。経済性からではなくもっと夢を街に取り込んでいこうと、安藤氏は強調する。

◎装飾古墳館で感じて欲しいこと

さて、鹿本町に建設が急ピッチですむ県立装飾古墳館。講演会場に参加した聴衆は前に現場を訪れている。ここでは建築を周囲の環境のなかに埋めこませようとした。ここを訪れた者が自然と対話することできるように、建築がけっして主張し過ぎることなしにそのような状況を作りだそうとしたのだ。

エントランスから建物にいたるまで竹林の中をぬける長い散策路が作られている。来館者はこの散策路を登り切って、初めて建物を見いだすのである。資料館内部にはさらに建物の屋上に一度登ってから、ランプを降りてアプローチする。その間、来訪者は周囲の自然とそこに佇む古墳の丘を望むのである。

安藤氏はこの敷地が市街から離れていて良かったという。古墳が内蔵する長い時間と対話するために1年に1、2回ここを訪れて「幸せだな」と感じて欲しいという。

◎生なりの文化を取り戻す

最後に紹介した計画はセビリア万博の日本政府館。テーマが「生なりの文化」ということもあって、巨大な木造建築とした。地上30メートルでワンルームの木造建築である。現場のスライドが紹介され、そのダイナミックな姿と共に日常見られることのない日本の感性が取り戻される様だ。ここに入ると、建築が木の匂いをともなって語りかけてくるという。

◎小さな建築でも自分は表現できる

安藤氏は再び最初に見せた小さな建物のスライドを写しだす。いくら小さな計画でも自分を表現することができる。その希望を捨ててしまったら、もう建築はできないという。安藤氏は20数年にわたって、小さな建築から大きな建築までを手掛けてきたが、表現者でありながら生活者である、つまり作る側でありながら同時に使う側であるということをつねに考えてきた。安藤氏はこのように講演の言葉を結んだ。

●参加プロジェクト・リスト

プロジェクト名	設計者名	作業過程	完成予定
熊本北警察署	篠原一男+太宏設計事務所	竣工	
県営保田窪第一団地	山本理顕	竣工	
加久藤トンネル換気所	小山明+バシフィックコンサルタンツ	竣工	
三角港フェリーターミナル	葉祥栄	竣工	
八代市立博物館未来の森ミュージアム	伊東豊雄	竣工	
熊本市花畑パークトイレ	大塚豊一	竣工	
熊本市上江津湖畔トイレ	日田兆	竣工	
熊本市営新地団地A	早川邦彦	竣工	
熊本市営新地団地B	緒方理一郎	工事中	1992.3
熊本市営新地団地C	富永譲	工事中	1993.8
熊本市営新地団地D	西岡弘	実施設計中	
熊本市営新地団地E	上田憲二郎	実施設計中	
県道橋景観整備(基礎調査)	倉俣史朗+高木富士川計画事務所	計画完了	
熊本市営託麻団地	坂本一成+長谷川逸子+松永安光	工事中	
山鹿市光のまちづくり計画	岩崎敬+瀬口英徳	構想完了	
牛深港架橋	レンソ・ビ・アノ+ビ・ター・ライス+岡部憲明+前田設計	工事中	1996
県営帯山A団地(公開コンペ)	新納至門	工事中	1992.3
玉名市文化施設(基本構想)	豊田文生	構想完了	
湯の香橋	岸和郎	竣工	
清和文楽館	石井和紘	工事中	1992.3
県立装飾古墳館	安藤忠雄	工事中	1992.3
球磨工業高校伝統建築実習棟	象設計集団	竣工	
鮎の瀬大橋	大野美代子+中央技術コンサルタンツ	設計中	
公園ファニチャーデザイン同整備マニュアル	沖健次+東京ランドスケープ研究所	設計中	
松島町下水処理場管理棟	斉藤宏	工事中	1992.3
石打ダム管理所	青木茂	竣工	

プロジェクト名	設計者名	作業過程	完成予定
県営新渡鹿団地	小宮山昭	工事中	1993.3
大津町第2庁舎および町民交流施設	鈴木了二	設計完了	
玉名市ふるさと展望館	高崎正治	工事中	1992.10
大甲橋景観整備	倉俣史朗	設計完了	
草地畜産研究所牛舎	トム・ハネガン+インガ・ダグ・フィンストッカー+	工事中	1992.9
	桜樹会・古川建築事務所		
再春館レディースレジデンス	妹島和世	竣工	
県立美術館分館	エリアス・トレス+ホセ・アントニオ・マルティネス・ラベレーニャ+	工事中	1992.9
	+大和設計		
湯前町まんが美術館	桂英昭	工事中	1992.10
県営竜蛇平団地	元倉真琴	工事中	1992.9 (第一期完成)
津奈木町物産センター	北山孝二郎	工事中	1992.5
チャペルの鐘展望公園	梅田正徳+スペースデザイン設計事務所	工事中	1992.9
花の交流館	ワークショップ	工事中	
阿蘇山頂広場公衆トイレ	木島安史	工事中	1992.2
パークビルII 換気塔	清水文夫	基本構想中	
白川橋景観整備	藤江和子	基本設計中	
杖立橋	新井清一	基本設計中	
石打ダム資料館	入江経一	基本設計中	

●くまもとアートポリス関連出版物のお知らせ●

くまもとアートポリスの関連出版物を各種用意しております。
ご希望の方は熊本県庁建築課内「くまもとアートポリス事務局」
電話(096)383-1111 内線6220~6221までご連絡下さい。

- 「くまもとアートポリス・パンフレット」
 - 「くまもとアートポリス・ポスター」
 - 「くまもとアートポリス・ニュース」バックナンバー01~07号
 - 「くまもとアートポリス・シンポジウム報告書1989」
 - 「くまもとアートポリス・シンポジウム報告書1990」
 - 「くまもとアートポリス・シンポジウム報告書1991」
- 新刊「カラー版・くまもとアートポリス・プロジェクトファイル」